

〈短歌〉

— 全体講評 —

短歌は五七五七七の五句三十一文字からなる短い詩であることは、周知のことですが、敢えてその定型を破って破調で詠うことで現実への違和感を表現するという方法を取った歌が今回ありました。基地の街の爆音を詠った歌です。心地よい韻律で詠うばかりが短歌ではないということが言える一方で、定型に収める努力はやはり最初の内はきちんとした方がよいと思います。定型が基本ですが、こだわりすぎてもいけない柔軟さも必要です。短歌の技法の一つである比喩を巧みに生かしたのが最優秀賞の歌でした。自分の目配りを春の雪の降りように喩えた一首です。「あわれ」など古典的な要素も加味しつつ現代的な感覚として詠われています。真つ直ぐに自分の現在の思いを表白した「十七の春」や「ラケット握る」の歌のきつぱりとした若々しさにも惹かれました。

長澤 ちづ

【最優秀賞】

寒き夜の五叉路を渡る目の配り春降る雪のあわれにも似て

吉川 美智子

— 講評 —

真つ直ぐに降らず揺蕩いながらゆっくり降ってくる水分の多い春の雪の降り方に五叉路を渡る自らの目配りを喩えてユニーク且つ情緒たつぷりの歌となっている。

【優秀賞】

大会に間に合うように初めての化粧おそわる十七の春

遠藤 加津樹

— 講評 —

何の大会か分からないが、大会に向けて全ての準備が終った段階の余裕ある緊張感が伝わって来る。十七歳の年齢が一首を引き締めている。

【優秀賞】

葉書にはあて名になしの印おされもどる紙面に叔母のほほ笑み

小倉 克允

— 講評 —

年賀葉書だろうか。年賀状の遣り取りほどしか普段は往来のない遠方の親戚もいる。そんな叔母を案じる思いが結句のほほ笑みに凝縮されている。

【優秀賞】

友に贈られし苗から育てた夏みかん碧天の下黄金に輝く

岸部 澄子

— 講評 —

夏蜜柑を美化し「黄金に輝く」という表現は特別個性的ではないが「碧天」との色の対比や上の句の丁寧な描写とのバランスの良い歌である。

【優秀賞】

山頂の鎮魂の鐘打ちたれば津波の跡地^{しんせ}返さず

熊谷 うめ

— 講評 —

鐘の^{しんせ}返らないのは地形の所^{せい}為なのだろうが、津波で亡くなつた人々の魂が未だに帰る場を失つて彷徨っているような当て^ど処なさを漂わす一首である。

【優秀賞】

手袋の中の百円あたたかし市民バス待つ通院の朝

小林 宏子

— 講評 —

市民バスは百円硬貨一つで病院まで連れて行ってくれるのだから。生活の一齣^{いちま}がさりげなく温かく詠われ、コインの丸み程の幸せが伝わってくる。

【優秀賞】

シャツルだけ一心不乱に追いかけて夢の中でもラケット握る

品田 真央^{まひら}

— 講評 —

バドミントンの試合に青春を懸け昼夜もない作者の熱中度がとても爽やか。一つことにかくも集中出来るのは十代の特権、詠い方にも無駄がない。

【優秀賞】

離陸待つ爆音木枯しに乗り広がる基地の街今日も青空

高橋 國眞佐

— 講評 —

爆音は軍用機の爆音。その軍用機が飛び立つのを目前にする作者。そんな特殊な状況が日常化する違和感が、ギクシヤクとした韻律^{いんりつ}に表れている。

【優秀賞】

去年^{こぞ}よりの通院の先見えて来し銀の産毛の冬木が芽ぐむ

高橋 スミ

— 講評 —

猫柳か何かだろうか。銀の産毛が芽ぐみはじめて、自分の通院の目処も付いてきたようだ、春の訪れを待つ心が詠われている。

【優秀賞】

バス停で「ご一緒しましょう」白い杖母に教わる小さな勇氣

富岡 繁

— 講評 —

目の不自由な方に会ったときどのように接するか、母上がお手本を示された様子が簡潔に詠い収められ、母への尊敬の思いが背後には感じられる。

【優秀賞】

ふみちゃんの笑顔に救われ乗りきったバスケ部の日々いま宝もの

中村 優奏はるか

— 講評 —

辛いことがあっても、心の通い合う友達がいると乗りきれれるもの。そんな友達が「ふみちゃん」なのだろう。いつもの呼び名で表記した具体も身近である。

【優秀賞】

吾の若き昭和の佳き日残りいる波郷はきょうが撮りし写真のなかに

山崎 正治

— 講評 —

昭和四十四年に亡くなった石田波郷はきょうは写真も巧みで、俳句と共に写真も多く遺し、それらが作者の郷愁をかきたてる。視点が面白い作品である。

【優秀賞】

「コツコツ」の音ふりあおぐ桜樹つがいを番の小啄鳥こげらはらせんにのぼる

山下 榮一

— 講評 —

観察力が行き届き、それは啄木鳥こげらへの親愛の情の濃やかさにも通じる。先ず音がして桜樹を仰ぎ、螺旋に上りゆく過程が時をかけて詠み込まれている。

《俳句》

— 全体講評 —

私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」と思っています。俳句が詩であるならば、理屈っぽく考えるのではなく、滑らかに稽^{かんが}えることが大事であり、俳句が滑稽^{こっけい}と云われる所以です。また俳句はことをものとして表現する文芸であるとも云われています。例えば抽象的な「平和」を具体的な「鳩」で表現するのが俳句であるということになります。スイスの思想家が「ものがもの自身に語る言葉」で表したものが詩であると述べたと聴きます。とするならば、我々人間はものになり切って、ものが語りかける言葉を戴き、詩にするほかにありません。今年の応募句にも沢山詩への挑戦を試みている作品がありました。同じ意味の語や季語を重ねない処から来る適度な飛躍とリズム。とても佳かったと思います。

梶原 美邦

【最優秀賞】

陽炎の根を掘っている道普請^{みちわがしん}

吉川 美智子

— 講評 —

野原に家が建つのか道造る工事が行われている。太陽の光が屈折してちらちらと立ち上ると、向こう側の労働者の影が、その根を探し頻りに掘っている。

【優秀賞】

霜柱ガラスの城を杳みにけり

足立 陸子^{くがこ}

— 講評 —

地上に透明な柱状の森が出現している。誘惑に駆られ、バリツと靴底を鳴らした。靴跡に神の呪^{まじな}いの如く玻璃^{はり}の城の幻影が立ち上る。ふと悔いが過った。

【優秀賞】

焼き芋屋やさしい声で遠ざかる

鹿沼 龍生^{りゅうせい}

— 講評 —

懐かしい声が聴こえてくる。薩摩芋の匂いがして、口の中にほっこりと味が滲んできた。車に駆け寄って買った。芋屋は前よりも優しい声で去って行った。

【優秀賞】

シクラメン話しかけつつ水を遣る

小林 莉子

— 講評 —

幼児と母とお花の会話。この桃色の花はね。ギリシャから来たんだよ。そうなの。この白いの。同じ。ねお花さん。さあ、ご飯上げよう。と話は尽きない。

【優秀賞】

父の膝とり合ふ子らや炉火明り

高橋 眞也

— 講評 —

家族団欒だんらんの囲炉裏火いろり。温まると安堵がやって来る。父親は膝を組んでいる。抱っこしてもらいたい二人の幼子が、競って膝を狙う。炉火ろびの静寂が時々跳ねる。

【優秀賞】

柿干して人の住む家らしくなる

高橋 光男

— 講評 —

空室ができて、物騒な世の中になってきた。が、我が家も傍はたから見ると、無人の家に見えるかもしれない。久しぶりに柿簾かきすだれを吊るし生きている家の証にしよう。

【優秀賞】

獅子舞の目の奥の目のやさしかり

竹岡 美恵よしえ

— 講評 —

舞う獅子の口で噛みついてもらうと、神が付くと言う。泣き叫ぶ子の頭を差し出し厄を払う。獅子頭の怖い目の奥の方に舞い手の優しい眼が垣間見られた。

【優秀賞】

はらからの揃うて見舞ふ春こたつ

竹中 白房

— 講評 —

春に母の病も小康から、快方へと向かった。知らせを受け、姉妹は元気づけようと揃って、見舞う事にした。それを聞いた母親は朝あしたから炬燵こたつで待ち受けていた。

【優秀賞】

大佛の背の窓ひらく春隣

露木 君江

— 講評 —

鎌倉の大佛の背には二つの扉がある。これは工事の時に土などを運び出す口だったが、今は大佛の暗い胎内巡りの照明や春が入って来る窓になっている。

【優秀賞】

漆黒の湿原ゆらり蛍かな

古木 せつ子

— 講評 —

釧路湿原であるうか。とつても艶のある闇の中に入って行くと、今日生まれたばかりなのか、弱々しいが美しい魂ともいえる蛍が、遠近にゆらゆらしている。

川柳

— 全体講評 —

川柳は口語体で人間の喜怒哀楽を詠む十七音の文芸です。五・七・五のリズムでの定型を基本としていますが、どうしても、それにあてはまらない場合は七五五、八九、九八の変格定型で詠むことも可能です。今回も上六、中六、中八、下六の、字余り、字足らずの作品が見受けられました。初心のうちは指を折り、十七音のリズムを確認しながら詠むと良いでしょう。作品を提出する前に立ち止まり、文字に誤りはないか、言葉の省略に無理はないか、句意が抵抗なくすんなり伝わるか、表現に無駄はないか等も丁寧にチェックしましょう。「推敲^{すいこう}」は作品を仕上げる上で、大切な作業です。思いつくまま詠んだ句と、推敲を重ねた句とでは、作品の出来に違いがでるのは言うまでもありません。

萩原 美和子

【最優秀賞】

聞き上手淀みの栓を徐々に抜き

神宮寺 茂太

— 講評 —

話が上手で受け答えも、そつがない人のようである。相手の気持ちを引きとると聞いて、話を進めるセンスの良さを感じる。下五の「徐々に抜き」が抜群。

【優秀賞】

髪切つて心も軽くする介護

井野 きつき

— 講評 —

病人や高齢者のお世話をするのは、気が休まる暇もなく苦勞が多いもの。髪も心も軽くして生き生きと働く姿が浮かぶ。言葉を選んで軽快に詠んだ。

【優秀賞】

ふりむかず共に歩んで半世紀

加藤 恵子

— 講評 —

半世紀の歳月を前だけを向いて歩いてきた夫婦。仕事や子育てをしながら、振り向く暇もなく、懸命に生きてこられたのだろう。毅然とした姿勢に共感。

【優秀賞】

また電話口車には乗るものか

北村 明延

【優秀賞】

辛抱で長い道のり老いふたり

山ノ井 松枝

— 講評 —

電話による勧誘が増えている。巧みな話術に乗らず、冷静に対応する様子をストレートに詠んだ。顔が見えない口先だけの甘い話には乗るなという、警鐘の句。

— 講評 —

長い道のりを連れ添ってきた夫婦の実感が伝わる。老いた今、互いに我慢をし、助け合ってきた人生を振り返るのである。上の「辛抱」に哀楽が滲む。

【優秀賞】

折れそうな心触れない愛もある

小糸 藍子

— 講評 —

心が折れそうになっても、そっとしておく愛があると詠んだ。核心に触れず遠くで見守るのも、立ち直ると信じているからだろう。無愛想な愛が浮かぶ。